五高時代（左：山下貞臣氏）

## 厚生省には高田先生のすすめで入省

大学を出た頃は、国家公務員の給料は民間企業の半分でした。民間会社からも二、三誘いがあったのですが、役人になったのは、元参議院議員で故郷の大先輩高田浩運先生のすすめでした。私自身も公的な仕事をしようと思っていましたし、高田先生は当時厚生省の人事課長をされていまして、先生の熱心な誘いで昭和二十五年に入省しました。入省後十年は、どの部署でも福祉制度づくりが大きな仕事でした。これまで省内の八局を経験しましたが、どこも重要な仕事ばかりでいろんな苦労もしました。特に印象的だったのは、昭和四十年から二年間、鈴木善幸厚生大臣の秘書官をしていた頃、医療問題が紛糾し、中央社会保険医療協議会が崩壊したときです。大臣は粘り強く東畑精一さんを口説き、会長に就任してもらい、医療問題の正常化に努められました。大変誠実な方で名大臣でしたね。

## 高齢化社会に耐える福祉制度を

昭和二十年代は新しい制度を作る一方で、福祉も進め進めの時代でした。そして三十年代半ばは国民皆保険、皆年金体制が整い、西欧に追いつき追い越せという時代。ところが四十年代末のオイルショックを契機に福祉行政の曲り角が到来しました。つまり経済の低成長時代と高齢化社会の到来が顕著な形で現われ始めたわけです。年金問題は今行革の柱となっていますが、なんにもしないで、ほっておけば将来大変な負担になるということで、高齢化社会に耐えられる立派な社会保障制度に今のうちに改めておく必要があるということなんですよ。そのためには制度を見直し、切るものは切り、守るべきものは守るという取捨選択と複雑化した制度の一元化を迫られることになるでしょうね。高齢化社会のピークは今から二、三十年後にきます。戦後のベビーブームに生まれた人達が年金受給者になる頃です。

スウェーデン、イギリスなどの福祉先進国も視察しましたが、現在の日本の制度は決して見劣りしませんよ。医療保険制度では世界一でしょう。年金の給付水準も欧米諸国と肩を並べています。

スウェーデンでは国民所得の七〇パーセントくらいが年金や税金に当てられていて、若い人達の負担になっています。日本では国民階層が納得できる負担の割合を見つけるべきですね。

## 水と緑を大切にしてもらいたい

熊本には年一回くらい帰るのですが、帰るたびによくなってきていると思いますよ。県では「強い熊本」を目指してテクノポリスや企業誘致に力を入れているようですね。ただ水は全国一ですし、緑も多い。企業誘致なり地域開発の際にそういったものを大切にしていくことが必要じゃないでしょうか。

教育についても県教育懇話会などを通して進学率の低下など論議されているとのことですが、確かに中央省庁の熊本県出身者が減っているという感じは受けています。しかし、それは地方の方が住み易くなったための全国的なUターン現象のひとつと解しています。ただ、地方も大切なように中央も大切。そういう意味では厚生省にもどんどん入省してもらいたいという気持もあります。

信条としては特にありませんが、あえて言えば自分の仕事を一生懸命にするということですかな。趣味はときどきゴルフに行くことぐらいであとはテレ寝（テレビを見ながらゴロ寝すること）です。今は仕事が忙しくて趣味に打ち込む余力がありません。（笑）

厚生省では福祉制度づくりを手がけていた



随想

# 豪傑編集局長伊東盛一さんのことども

楠田主計

熊日の名物重役で鳴らした伊東盛一さんのことを、ご存じの方も、もう少なかろう。終戦直後のころ、米軍の占領政策で、新聞社の朝・夕刊兼営が禁止された。熊日も、新たに「夕刊くまもと社」を創立、この夕刊くまもとの初代編集局長として迎えられたのが伊東氏だった。朝日新聞の編集局長や満州総局長などをつとめた根っからの新聞人で、朝日をやめてから郷里の福岡で、雑誌社の経営などをやっていたところを熊本へ呼ばれた。ざっくりとした厚手の、ハデな赤シマ模様の上衣を無造作に着こなして、いつもピカピカに磨き上げた靴で、上通り界隈をかっぽしていた。赤ら顔のししっ鼻は、映画会社のメトロゴールドウィン・メーヤーのトレードマークのライオンにそっくりで、〝メトロ〟というあだ名がついていた。マドロスパイプを口から離さないなかなかのおしゃれで、当時、小唄勝太郎や市丸が熊本にやってくると、東京で鳴らした派手な交友ぶりをひけらかして、熊本の料亭のおかみたちを、うらやましがらせていた。

夕刊くまもとが募集したミス熊本のお嬢さんに、編集局長のご本人が、のぼせ上がってしまい、あげくの果ては、養女にして入籍するなど、派手な話題にことかかなかった。

部下をしごくのも定評があり、鬼編集局長の異名がとどろいていた。ある日、夕刊のゲラ刷りを点検していたとき、整理部員の記者のつけた見出しがどうしても気に入らない。「こんな下手な見出しで新聞が売れると思うか」と、伊東さんはおこってしまい、「よし！おれがお手本を示してやる」と、やおら赤ペンを取り上げて、大見出しのカットの文句を考えていたが、悲しいかな、長年、現場を遠ざかっていた伊東さんには名文句が浮かばない。苦吟十数分ー、やっとつけたのが「アメリカは赫怒（かくど）した！」のメイ見出しだった。あとで伊東さん、「おこってつけると、ロクな文句は浮かばんなア」と頭をかいていた。数年ならずして、職を辞したが彼が創設し、自ら筆を取りつづけた「もっこす」という名のコラム欄は、今の熊日にも受けつがれ、伊東さんの、歯に衣着せぬ論評の切れ味を、なつかしむ人も少なくない。

この伊東さんが、朝日の社会部次長をしていたとき、配下の遊軍記者に扇谷正造氏（評論家・元週刊朝日編集長）がいた。昭和十三年、東大が開発した飛行機で、一万キロ無着陸飛行が木更津を中心に行われた。三日三晩飛びつづける世紀の第一報を、扇谷氏が取材、東京へ送稿するため現地の電話にかじりついた。本社の電話口には伊東デスクが出た。扇谷氏は東北弁の上に、社内随一の早口だ。一つの電話に順番を持つ各社が後ろにならんでいるせいか、この日の扇谷氏は平泰に輪をかけた早口で、伊東デスクはほとんど聞き取れない。何度か聞きかえしていたが「何を言ってるのか、さっぱりわからん」と、かんしゃく持ちの伊東さんがサジをなげてしまった。

伊東さんは、扇谷氏の原稿など、そっちのけ、当時、社内の飛行機通で通った斎藤寅郎氏の話をきいて、記事をデッチ上げてしまったという。扇谷さんが、このときのことを書き随筆がある。それには「電話先に、伊東デスクが出られたのは、私の一生の不運でした」と書いている。

その伊東さんが、神奈川県逗子の仮りずまいで、孤独の生涯を閉じてから、もう十年になる。

（熊本放送・元局長、「くまもとフォーラム」主宰）